

## 第34号

# 札幌交響くらぶ

発行／札幌交響くらぶ  
 (財)札幌交響楽団内  
 札幌市中央区中島公園1番15号  
 (札幌コンサートホール内)

## 札幌初の韓国公演大成功

### 熱狂的な聴衆に感動

札幌は今年、初の韓国公演を行いました。日韓関係が冷え込む中、様々な心配事が予想される中での公演でした。しかし、新聞報道などでも伝えられた通り、公演は予想以上の大成功で終わりました。札幌専務理事の西村善信さんに、韓国公演の報告を寄稿いただきました。

韓 国 公 演 報 告 財団法人札幌交響楽団専務理事 西村 善信

9月末から10月初旬に韓国のソウルと大田(テジョン)の二都市で公演を行いました。札幌の海外公演は2001年の英国公演いらい4年ぶりです。「日韓友情年2005」の記念事業として、「ソウル国際音楽祭」に招聘されました。あわせて、札幌市と交流の深い大田広域市での公演が実現しました。

日本の隣国とはいえ韓国公演は初めてです。海外経験の多い楽団員達も韓国は未知の土地で、不安や緊張そして期待やいろいろな気持ちを抱えながらの演奏でした。

そんな気持ちを一瞬にして喜びに変えてくれたのが、演奏が終わったあとのお客さんの反応でした。ブラボーならぬ「ウォ〜」という大歓声と爆発的な拍手、そして会場のいたるところでのスタンディングオベーションには同行した100人近い北海道の人たちも一緒に立ち上がりました。日本とはずいぶん違う反応に、尾高音楽監督も楽団員も驚いていました。

そして、この拍手が遠来の客へのおもてなしではなく、札幌の演奏に対するものであることは公演後のレセプションでよく分かりました。会場ロビーで開かれた韓国音楽協会主催のレセプションには、韓国外務省の高官、大島日本大使はじめ在韓の各国大使ほか韓国の音楽関係者が参加していました。その中で挨拶に立った韓国音楽評論家協議会の金会長は「私は韓国で一番の辛口評論家といわれています。もしここでお世辞を言ったら仕事を失いますので本当のことを言います。札幌交響楽団の演奏がこんな

に素晴らしいとは思っていなかった。東京のオーケストラと比べて実力が一段落ちると思っていたのは間違いでした」と率直な感想をいただきました。韓国音楽協会の方も同じ事を話していました。韓国では、プロのオーケストラが30以上ありますが、ソウルと地方都市のオーケストラでは実力にはっきり序列があるようです。日本も同じと先入観をもっていたところ、北の果ての札幌にこんなに素晴らしいオーケストラがあったのか、と驚いたようです。翌日の大田公演でもソウルと同じ反応がありました。

今回の韓国公演では、コンサートのほかソウルでの北海道の観光誘致キャンペーンに金管アンサンブルが参加、大田では福祉施設の訪問、中学校での演奏など地域交流事業も行ってきました。札幌は、近年地域と密着した活動を積極的に行って来ました。普段のままで韓国に行って来ましたが、音楽に造詣の深い大田市長はしきりに感心しておられました。札幌ならではの地域交流が実現できました。

韓国の後、福岡・東京と国内公演が続きました。ここでも高い評価をいただきました。3年前から存続の危機を乗り越えようと、音楽を通じた地域活動を行い、そして常に「世界の札幌」を目指す高い意識を持ち続けてきた楽団員にとって、今回の韓国公演は新たなステップとなったはずです。挑戦を続ける札幌に、札幌くらぶの皆さんの温かいご支援を引き続きお願いします。

札幌くらぶは札幌を愛する人達の札幌応援団です

# コンマスは語る

札幌交響楽団  
コンサートマスター

かの  
管野 まゆみ さん

人前で弾くことは  
自分のためになります!!



## 管野まゆみさんのプロフィール

仙台市出身。東京芸術大学附属高等学校卒業。同大学入学3カ月後にアメリカのサンフランシスコ音楽院に招待留学。在学中、コールマン・ナショナル室内楽コンクール第1位。また、タングルウッドのバークシャー音楽祭では最優秀ヴァイオリニストとして、シルバースタイン賞を受賞する。卒業後、同音楽院講師、スタンフォード大学講師を務め、スタンフォード弦楽四重奏団、後にフィラデルフィア弦楽四重奏団の第1ヴァイオリニストとして全米、メキシコ、ヨーロッパで演奏。その後、シラキュース・シンフォニー・オーケストラのアソシエイト・コンサートマスター、ヴァンクーバー・シンフォニーの首席第2ヴァイオリン、東京交響楽団のアシスタント・コンサートマスターを務めた後、ゲスト・コンサートマスターとして読売日本交響楽団をはじめ数多くのオーケストラと協演。1995年にはジュネーブでの国際連合50周年記念オーケストラ（ショルティ指揮）に日本代表で参加した。1998年より札幌交響楽団のコンサートマスターを務めている。

10月8日、スタッフの勉強会のワンステップの締めくくりとして、コンサートマスターの菅野まゆみさんのお話を伺いました。

韓国、九州、東京での連続公演から戻り、明日は士別での公演というお忙しいスケジュールの中、ご自身の音楽への思いや実践などをお話下さいました。そのお話の一部を会員の皆様にお届けいたします。

私は、個人的に札幌くらぶの皆さんに感謝していますし、札幌くらぶコンサートも本当に楽しみにしています。先ほどの小ホールでのアンサンブルによる札幌くらぶ主催のコンサートを、という件からお話したいと思います。札幌の危機が叫ばれた3年前から、特別業務ということでアンサンブルを組んで、いろいろところで演奏しています。今、とても優秀な若い団員さんがたくさん入ってきていますが、そういうかたちを育てていくことは私達の責任でもあり、オケの責任でもあると思います。しかしその特別業務が多く、病院、学校その他多くの場所に行って演奏することに精一杯で、何か目的を持って、それに向けて一生懸命勉強していくという機会がすごく少ないのが現状です。ご存知のようにポルトでのコンサートもありますが、出演者が首席の方が主であるなど限られているようですし……。ですから、札幌くらぶさんのご提案は非常に嬉しいことです。

オーケストラメンバーにとって、室内楽をやるということはすごく大切なことです。室内楽をやることによって、自分のパート以外の楽器と身近に合奏ができてその楽器のことを深く理解するようになります。そうして、様々な楽器の特性と曲の構成を深く理解して演奏するのと、そうでないのでは、オーケストラ演奏の深みが全然違ってきます。だから、室内楽を多くやればやる程、オーケストラの質は向上すると思います。

日本では室内楽はあまり盛んではありません。私はアメリカには15年住んでいましたが、どなたかのお宅に伺って室内楽を演奏するというような機会が非常に多くありました。日本の場合は、住宅状況ということもあって盛んじゃない、特に北海道の場合はあまり機会がないように思いました。それが、特別業務ということで機会が増えたのは良いのですが1回2回の練習でパッとやってしまうだけです。

そうではなく、本当に2カ月3カ月一生懸命練習して演奏会に持って行くことができれば、若い人たちを育てるという意味からもすごくいいと思います。そういう意味で、サポートしていただけるならば、本当に嬉しいです。

話は変わりますが、音楽教室では楽器の紹介をします。ヴァイオリンはこんな楽器で、こんな音ですという具合に。いつもそれをやるのは首席奏者です。それも仕事のうちなのかもしれませんが、私はある時、若い人たちはなかなかソロをやる機会がないので、そういう時に希望する人がいたらやらせてあげたらどうか、と提案したことがありました。例えば、あるオーケストラでは、新しい団員さんが入ってくると、そういう人たちに登竜門というのでしょうか、ヴァイオリンならメンデルスゾーンのコンチェルトなんかを弾かせるのです、皆の前で。そういう若い人たちを育てるということを、オーケストラ全体でやっている訳です。私は札幌でも、首席だけではなくテュッティで入った人にも一人で弾く機会を与える、ということをやりたいのですが、なかなかそこまでは行きません。ですから、札幌くらぶさんが、例えば室内オーケストラ、15人前後でできますよね、そこにヴィバルディのコンチェルトを入れたりして、テュッティの方にもソロを弾いてもらえるような、そういう機会を作って下さったらとても嬉しいことだと思います。

実は、私はオーケストラというのは経験が浅いのです。アメリカに行って、ソリストになるべく勉強していたのですが、もちろん、ソリストになる門は非常に狭いものです。私の場合はカルテットをずっとやっていて、サイドであちこちのオーケストラに呼ばれてコンマスをやっていました。実は、私はオーケストラには絶対入るまいと思っていたんです。そのことを、今日ここに来るまでに思い出していました。やはり、自分の音を皆様に聴いてもらいたい。どうして小さい頃からヴァイオリンをやっているかと言えば、自分の信じること、自分の音を聴いていただきたいということで、良い音を出したくて練習してきたのです。それが、オーケストラに入っちゃうと80分の1の音になっちゃう訳です。管楽器のかたの場合は、それぞれのかたがソロのパートなので自分の音がはっきり聞こえます。しかし、弦楽器の場合、ヴァイオリンですと12人から16人の内の一人で皆同じ音を弾いている訳ですから、自分の音がど

こまで皆に貢献しているのか、ということや、自分は一生懸命この音を聴いてもらいたいと思っているのに、それが伝わっているのか、ということがよくわからない。

オーケストラで演奏している人は、多かれ少なかれ、そういう悩みをお持ちだと思うのです。今の札幌は、そんなことは感じさせないように、後ろから聞こえてくる音もすごく一生懸命で、良いと思います。でも、もっともっと私達が自分の音にこだわって、一人一人が、私の音がオケにとって大切なんだということを実感できるためにも、室内楽や前に立ってソロを弾いてもらうことは大切だと思います。そんなことを、西川さんのお話を伺って、実現できたらすばらしいなと感じました。



コンサートマスターという立場についてもよく聞かれます。なぜか私は、高校のオケからずっとコンサートマスターでした。周りに私よりも上手な人がいるのに、なぜかコンマスでした。アメリカの音楽院のオケでも、1年生の時はセカンドのトップでしたが、2年生からはずっとコンマスでした。卒業してからも、ソロもたくさんやりましたが、なぜかコンマスの仕事が多かったのです。どうしてそうだったのかは、今もよくわかりません。でも、今はコンサートマスターという仕事が、本当に楽しいんです。とにかく良い演奏になるよう、指揮者の意図するところを団員さんに伝える、逆に団員さんの意向を指揮者に伝える、そのようにして良い演奏を作っていくことがコンマスの役目だと思っています。以前は、指揮者とけんかしたりしたこともありますけれど、そんなことをしても良い結果は生まれず、最近少し大人になって、とにかく良い結果が出るようにと目的を持ってやってきたら、とても楽しくなりました。自分を捨てて、良い演奏のためだけに打ち込めるようになりました。さっき来る時に思い出

していたのですが、アメリカにいた時は、それだけでなく日本人は若く見られますから、後ろにすごい人がいっぱい並んでいて「何でお前がそこに坐っているんだ」みたいな感じで、相当鍛えられました。でもそのお陰ですごく強くなりました。涙を流したこともあります。それをバネにして皆に認められるようにと努力したことは、すごくためになりました。で、今はボーイングを決めたりとかの仕事もありますが、とにかく良い演奏になるよう、指揮者ともよく話し合っています。山田一雄さんが、「どんなに年をとっても、練習の前日は眠れない」と書いていらっしゃるんですが、若い指揮者の方なんかは、緊張でこちこちになってふるえている、それを少しでも楽にさせてあげるとか、そういうことまでこの頃気をつかえるようになりました。

最近、札幌もポップスなど、いろいろな曲を演奏するようになりました。札幌くらぶコンサートでもそうですね。また昔のお話になりますが、アメリカにいた時は、多い時には週に3回くらい、いろんなお宅に伺って、お食事をいただいたりお酒を飲んだりしたあと、さあそれじゃと、カルテットやクインテットを弾いたり、ピアノが入ったり。半分遊びみたいなものですが、多くは初見で様々な曲を演奏して、大人から子供まで皆で楽しむというような経験をしました。あるお医者様の家では、自分が第2ヴァイオリンをやりたいとあって、3人のプロの中に入って、次から次に初見の楽譜を出して来て演奏しました。そんな経験を踏んで、私の初見力は確実に向上しました。プロの中には、アマチュアとは絶対に弾かないという人もいますが、それは違うと思います。どんな場でも弾いていると、必ず自分のためになると思います。

今、私達札幌のメンバーは特別業務ということで、病院、老人ホームに行っています。私は、そのほかにもボランティアでいろいろな活動をしています。聴いている人のためにももちろん弾くんですが、自分のために弾いているんだ、ということにこの間はと気づいたんです。人前で弾くということは、3か月間自分の部屋で練習しているよりも絶対効果がある、勉強になると気づきました。札幌の皆も、いろんな所で弾いています。この間、韓国でも、私はロビーコンサートでしたが、学校に行って弾いた人もいます。養老院にいった方は、すごく綺麗な所だとびっくりしていました。そうやって積極的にや

っている人たちは、どんどん上手になっていっていると思います。忙しいんですよ皆さん。札幌のスケジュールをこなすだけで、特に若い人は初めてやる曲が多いですから精一杯なんです。それでも一生懸命頑張っていて、そういう活動もしているのを見て「ああこれからの札幌はこういう人たちで支えられるんだなあ」と思っています。

人前で弾くのは自分の勉強になりますが、特に生の音を、空気の振動を直に感じていただくことが大切だと思います。去年の夏に十勝地方に行った時に、牧場に行ったら本当に牛にモーツァルトを聴かせているんです。お話には聞いたことがありましたが、牧場の人に聞くと、本当に乳の出が良いそうで



す。また、アメリカで実験したそうですが、お花に音楽を聴かせるのとそうでないのとでは、育ち方が全然違うそうです。まだ解明されていない点もありますが、音による振動というのは何か絶対に良い効果があるのだと思います。最近では日本でも、音楽療法というのが注目されるようになりました。

この間、網走ですごく重度な方の老人ホームに行ってきました。平均年齢が84歳でした。皆さん車椅子で、100人くらい集まってくださいました。うつむいていらっしゃるかた、耳の悪いかたもいらっしゃる。近くに寄って弾いたりしたら、顔をあげて見てくださいました。最後に日本の秋の歌を何曲か弾いたら、何人かの方が一緒に歌って下さいました。「こんなことはなかったんですよ」と言って下さいましたが、その時には確かに何かが起こったのだと思います。

私の父も80歳です。実は、一番弾いてあげなければならぬのは父だ、と気づいて愕然としました。  
(佐藤良次)

## 印象に残る協演者④



指揮者ウォルター・ジュスキントは1976年1月第156回札幌定期に登場した。これが唯一度の来日で、東京都響と札幌響を指揮した。この時点ではセントルイス交響楽団音楽監督だった。

ジュスキントは、ヴァイオリンの名手メニューイン、シモン・ゴールドベルク、ピアノのグレン・グールドなどとのモーツァルトやブルッフの協奏曲の録音指揮者として、サヴァリッシュやカラヤンと同じようにその名が知られていた。

13年チェコのプラハ生まれ。プラハ国立音楽院に学びピアニストでデビューし、翌年プラハのドイツ歌劇場の指揮者に就任した。38年にオランダを旅行中、プラハがドイツに占領されたことを聞き、ロンドンに居を移し、一時ロンドン・チェコ・トリオのピアニストを務めたりした。

早くからレコードで親しんでいる大指揮者だったし、生真面目そうな写真から、気難しい年老いた大指揮者との先入観があった。緊張しながら千歳空港へ迎えに行った。

男女2人です、との連絡をもらっていたので老夫妻で現れるだろうと、ガラス越しに捜したが、それらしい人は見当たらなかった。やがて背の高い娘を伴った父親と思われる外人が、大荷物を載せた車を押して出て来た。ふと顔を見ると、写真に似ている。「マエストロ・ジュスキントですか」と声を掛けると「イエス」「お迎えに来ました札幌の竹津です。ようこそお出でい

ただき有難うございます」「よろしく。彼女はロンドン大学の4年生……さん」と答えた。なんとなくそれ以上聞けなかった。

宿泊は札幌パークホテルだった。チェックインの時、「部屋に注文があるのだけど良いか」「なんですか」「日本間で布団に寝たい」とのことだった。ホテル側は相談した上で「不都合が有ってはいけなないので竹津さんも一緒に来て部屋を確認して下さい」と同行を求められた。日本間があるのかと半信半疑見に行った。

20畳位の大きな和室に控部屋が付いた、あたかも由緒正しい高級日本旅館を思わせる造りの日本間だった。宿泊代を気にしながら、ホテルの説明を聞いた後、私は黙っていた。マエストロ・ジュスキントも黙って22歳の彼女の顔を見た。お二人は大変満足そうで、その部屋に決まった。

札幌の予算内に収めていただくようお願いした。

翌日からは精力的にしかも要領よく、有無を言わさぬ力強いリードで練習を進めた。1月27日の定期演奏会では、モーツァルトのピアノ協奏曲第23番イ長調の弾き振りも完璧にこなし、「エグモント」序曲、ブラームスの交響曲第3番も整然としたゆるぎない指揮で札幌を導いた素晴らしい指揮者だった。4年後、66歳で亡くなられた。

大物指揮者は、さりげなく名演を聴かせる。私はついにお二人の関係を聞けなかった。

from 「札幌くらぶ」

### 練習見学会はキタラで

今年の練習見学会は、11月10日（木）午前キタラで行われた定期演奏会の前日の練習を、札幌が一般に公開したのに合わせて実施されました。平日にかかわらず、多くのファンが参加しました。例年行っている芸術の森での見学会は、適切な日程がなく、今年は実施しないことになりました。

## PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 ファゴット副首席奏者

むらかみ あつし  
村上 敦 さん

### ご出身は

道東の生田原町です。今も両親が住んでいますし高校までそこで暮らしました。

### 楽器との出会いは

小さい時から歌うことは好きでした。北見地区というのは吹奏楽が盛んなのですが、中学校に入学した時の担任が吹奏楽を熱心にやっている音楽の先生で、クラスの半分くらいが吹奏楽部に入れられました。それが楽器を始めるきっかけでした。中学校では、サクソフォーンをやっていました。

### ファゴットをやるようになったのは

遠軽高校に進学しました。当時、吹奏楽部が全国大会に行くような高校で、非常に厳しい学校でしたが、たまたま、僕が入学する1年前までファゴットをやっていた人が転校した為、中学時代木管楽器経験者ということでファゴットにさせられました。それがファゴットをやり始めるきっかけでした。ちなみに、その僕の前にファゴットをやっていた転校生というのが、いま札幌で一緒にやっている坂口聡さんです。何か、運命的な縁を感じますね。

### 専門にやろうと思ったのは

非常に熱心な学校でしたから、一生懸命練習しているうちに徐々に技術も向上してくるし、面白くなって来たのですが、プロになろうという意識はなくて、音大に行って音楽の先生になろうと思ったのがきっかけでした。それで、高校2年の終わり頃からドイツから帰られたばかりで、かつて札幌にもいらした高橋勝夫先生に習い始めました。

### それが プロになろうと思ったのは

教員を目指していましたが、実際に音大に行ってみると皆そんな意識はなく、プロのプレイヤーを目指しているんですね。そんな中、2年生の時に僕の



所にもオケの仕事が来まして、プロのオケに乗ってみますと、その集中力や技術の高さに圧倒され、これはすごい世界だな、と思い、それからは演奏家を目指し、練習の日々を送りました。

### 札幌入団のいきさつは

音大卒業後、桐朋学園の嘱託演奏員やオケのエキストラなどを7年やっていましたが、たまたま、札幌が3管編成から4管編成へという時にぶつかり、入団することが出来ました。東京で生活する中で、演奏会では音楽に集中できるのですが、終わって電車に乗った時から、生活の中に音楽との繋りがない生活に疑問を感じていました。道産子ですから、自然に触れ合う中で自らの中に音楽を感じるというようなことは体験していましたから、いつかは北海道に帰ってという気持ちはありました。

### 何か趣味はお持ちですか

2・3年前から映画にはまっています。昔の名画も、現在の作品もまんべんなく観ます。月に5・6回くらいは映画館に行っていると思います。それ以外では、東京公演の時などに楽器のメンテナンスを頼むのですが、そんな時は楽器はありませんから、一日中、新宿末広亭（寄席）に入りびたっています。

### 最後に ファンに一言

オーケストラの仕事は、同じ曲を何度も色々な指揮者で演奏しますが、毎回、新鮮な気持ちで、一期一会を大切にステージに立っています。これからも応援よろしくお願い致します。

## 札幌交響楽団 ヴァイオリン奏者

たが ますみ  
多賀 万純 さん

### ご出身は

名古屋市で生まれ育ちました。高校も大学も名古屋でした。愛知県立芸大卒業後、姉の出身校である神戸女学院大学音楽専攻科で1年勉強しました。

### 音楽を始められたきっかけは

母の勧めで、3歳からピアノ、4歳からヴァイオリンを始めました。自分からというのではなく、楽器を持たされて始めたという感じです。小6から、地元のジュニア・オーケストラに入って、それから高校3年生までは毎週日曜のオーケストラの練習日をいつも楽しみに、学校生活を送っていました。

### 専門に音楽をやろうと思ったのは

中学校の頃だったと思います。それで、高校も音楽科に進みました。

### 札幌入団までの経緯は

専攻科修了後3年位は、名古屋と関西を歩き来して、神戸女学院大の授業のお手伝いをしたり、オーケストラなどの演奏のお仕事や、名古屋の専門学校で教えたりしていましたが、2002年と03年にPMFに参加しました。その時、初めて札幌の演奏を聴きました。何よりも、弦楽器の音色に惹かれたのですが、ステージでの札幌の、全体の空気とか雰囲気とか、私にはとても心地よくて、客席にいてもオーケストラに自然と吸収されてしまいそうなくらいでした。他のオケの演奏も聴いていましたが、札幌と出会ってから、ここでできたら幸せだな、と思いました。それで、募集を見付けて迷わずオーディションに臨み、幸いにも合格できました。

### PMFでの体験は

当時の私は、演奏そのものが守りの姿勢でした。PMFで、皆さんが自由にのびのびと、力一杯演奏している姿に触れ、私も自分の音を認めて、納得して、それを表現してゆかないと何ともならないなと思いました。あとは、楽器を持たない時間をしっかり楽しむこと、休むことも、大切だと思いました。



### 北海道での生活はいかがですか

2月の中くらいに来ましたが、まだとても雪深く、寒くて、こんな所では生活できそうにもないから、逃げ帰ろうかと思ったりしました。でも、暮らしてみると、食べ物も美味しいし、遠くの山もすっきりと見え、空気もすがすがしいですね。札幌の演奏もすごく好きなので、今はもう逃げ帰ろうという気持ちはありません。

### 何か趣味はお持ちですか

お茶が好きで、中国茶や紅茶など、色々な種類のお茶をいれて、練習場へ持参しています。あとは、ひとりで温泉を巡ったり、体のためにパワーヨガに今は励んでいます。車の運転も好きですが、本格的な冬道での運転経験はありませんので、今は不安です。

### 札幌くらぶについては

5月の交流会に参加させていただきましたが、私は札幌に知人も少ないので、札幌についてどう思われているのか、お話する機会はありませんでしたから、会員の方々から直接に、要望や期待などを伺うことが出来、自由に意見を交換できる場でしたので、非常に貴重に思いました。目に見える形で応援して下さっていることは、とてもありがたいことです。私たちも頑張りますので、これからも札幌をよろしく願います。

(佐藤良次)

from 「札幌くらぶ」

## 「広響フレンズ」の皆さんと楽しいひと時を！

「広響フレンズ」は広島交響楽団のファンクラブで、どなたでも会費3,000円を払うと、加入でき、楽団員等との交流の場も設定されています。

去る9月19日、広島へ出張の折、「広響フレンズ」谷邦彦さんのお世話で、細工実さん、花平勝全さん、山口治雄さん、佐藤幸一さんの5人が集まって、札幌くらぶとの交流会(実は飲み会)が実現しました。

「わが町のオーケストラ」支援を全国規模で展開が可能になれば、もっとたくさんの方が反映できると思い、「全国オーケストラファンクラブ」(仮称)を結成すべく行った山形宣言を、広島もどうですか、とお誘いしたところ「来年は、札幌キタラホールで札幌交響楽団を聴いて、全国交流会へ参加したい！」との大賛同をいただいて、盛り上がりました。

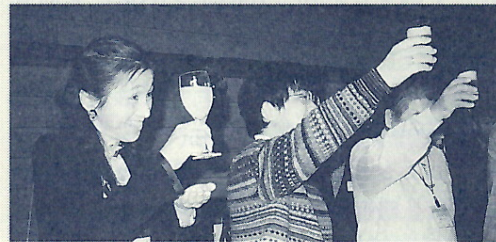
「広響フレンズ」にも課題があり、早く札幌くらぶのように自主的運営にしたいと熱望されており、ファンクラブの在り様についても熱く議論をし、日本酒が追加された楽しいひと時でした。

「広響フレンズ」の皆さんありがとう！ともに全国のファンのために一肌脱ぎましょう！来年、札幌でお待ちします。 札幌くらぶ事務局長 西川吉武



### 第二回交流会実施

本年度第二回の交流会が、11月12日(土)定期演奏会修了後、午後6時からレストランキタラで開催されました。今回は出席者が40名程度と、やや寂しい交流会でしたが、その分いつもよりも親密で和やかな交流会となりました。今回も色紙販売が行われ、当日の指揮者高関さんや、コンサートマスターの菅野さん、そして上田会長にサインを求める人もいました。色紙の売りあげ金は、その場で札幌に寄付されました。次回の交流会の実施については、スタッフで議論したいと思います。



## 編集後記

今年は例年に比べて雪が遅いようです。しかし、年末は確実に近づいています。今年最後の発行となりました。

06年度の定期演奏会のラインナップが発表されました。客演される指揮者、ソリストの超豪華さにまず驚かされます。また、チェロ首席の石川祐支さんがソリストとして登場されるのも楽しみです。

3月発行予定の「札幌くらぶ」35号では、昨年、一昨年に続き、音楽監督の尾高さんに06年度のプログラム、出演者の解説をお願いする予定です。毎回ご好評をいただいておりますが、お楽しみにお待ちください。お馴染みの尾高節を、文字でお聞かせ致します。

会員の皆様が、良いお年を迎えられますようスタッフ一同お祈り致します。(佐藤良次)